

患者さんたちの 笑顔や声に接することが やりがいにつながる

和田さんは、経験豊かな看護師です。結婚を機にいったん退職したものの、まもなく復職しました。患者さんとの触れ合いを通して自分の仕事の意味を再確認し、そのたびに看護師という職業のすばらしさを感じると言います。近年は若いスタッフたちの育成も担当し、より充実した看護を行うために忙しい日々を送っています。

看護師 和田みどりさん



わだ・みどり ●昭和39年東京都生まれ。高校卒業後、千葉大学医学部附属看護学校に進学。同校卒業後に千葉大学附属病院小児外科・小児科に勤務。結婚を機にいったん退職したが、復職。現在、社会福祉法人千葉県身体障害者福祉事業団千葉県千葉リハビリテーションセンターに勤務。同センター副看護部長兼人材育成部副部長。



結婚を機にいったん退職し、後に復職

——看護師になろうと思われたのは、何かきっかけがあったのですか。

和田 当初、私は臨床検査技師になりたいと考えていたのです。ところが高校2年生のとき、看護師だった叔母から、自分が勤めている病院で1日の看護体験実習があるので受けてみないかと誘われたのです。私はその実習に看護師を希望していた友達と2人で参加しました。実習を終えた後、その体験を感想文としてまとめたのですが、叔母は「とてもよく書けている」と褒めてくれました。今ではどんなことを書いたのかほとんど覚えていないのですが、その叔母の言葉をきっかけに看護師になることを考え始め、高校卒業後に千葉大学医学部附属の看護学校に進

みました。看護学校生の3年間は寮生活を送り、とても楽しく、また充実していました。

——看護学校卒業後、千葉大学医学部附属病院に勤務するのですか。

和田 ええ。子どもを対象とする診療科に勤務したいと希望しました。最初は小児外科に配属され、その後小児科に移りました。その病院には3年あまり勤務し、結婚を機に退職しました。大学の附属病院は夜勤も多く、家庭と仕事の両立は難しいと感じたからです。

——しかし、しばらくして看護師として復職されていますね。

和田 看護師という仕事が嫌になっただけで辞めたわけではありませんから。むしろ大きなやりがいを感じていましたし、家庭との両立さえできればいつか

は看護師の仕事に戻りたいと思っていました。そんなとき、同居していた夫の母が「家事と育児を引き受ける」と言ってくれたのです。さらに「看護師は価値のあるすばらしい仕事だから」と私の復職を後押ししてくれました。義母にはとても感謝しています。

——看護学校の生徒であったときと実際に看護師として働き始めたときとを比べて、ギャップのようなものはありましたか。

和田 ほとんどありませんでした。ね。というのも私が看護学校生だったときのカリキュラムは病院での実習がとても多く、患者さんと接する機会もたくさんあったからです。重症の患者さんと接することも少なくありませんでした。正直、ハードな日々でしたが、看護師の仕事はどのようなかを直に学ぶ貴重な体験をさせてもらったと思います。もちろん、学生ではなく実際に看護師として働く場合に大きな責任が伴うという違いはありますが…。

患者さん一人ひとりに
人生があることを忘れずに

——看護師というお仕事のやりがいは何のようなものなのでしょうか。

和田 私は子どもの患者さんに多く接する現場で仕事をしてきました。生死にかかわるような厳しい場面にもたくさん出会いました。そうした中でも子どもたちは笑顔を見せてくれます。また「必ず来てね」とか「来てくれたんだ」



▲千葉県千葉リハビリテーションセンター



スタッフたちとミーティング。申し送り事項を確認し、患者さん一人ひとりの状態を把握し、的確な指示を出す。

と声をかけてくれることもあります。そのような子どもたちの笑顔や声に接するたびに「自分は患者さんに必要とされている」「役に立っている」と思うのです。

また周囲の人々も「看護師は素晴らしい仕事」と言ってくれます。そうした声を聴くと「自分はそのすばらしい仕事に就いているんだ」と思いを新たにします。

——お仕事への厳しさはどのようなところにありますか。

和田 看護師には夜勤があり、一般の方たちと生活時間帯が違います。また仕事も時間通りに終わらないことも珍しくありません。そのため、行動時間を家族の生活に合わせるのなかなか大変です。私の場合は、先ほども申し上げたように義母がサポートしてくれたので助かりました。

——お仕事ではどんなことを心がけていますか。

和田 患者さんはそれぞれ育った環境も生活の様子も異なり、価値観も違います。その患者さんたちにどのように対応するのはなかなか難しく、「これが正しい」という答えはありません。私の場合、患者さんやご家族から厳しい言葉や態度をいただくときも、頭ごなしに否定せず、まずは真摯に受け入れて一呼吸おいてから、ポジティブな言葉をかけるように心がけています。特に子どもたちは周囲からの言葉を吸収して育ちます。頭ごなしに厳しい

態度で対応しても決していいことはありません。それはこれまでの経験から身に染みています。そういう意味では、子育てから得たことはとても大きく、仕事にも役立っていることは間違いありません。

また病院の立場、医療の論理だけでは十分に患者さんの思いに伝えることはできません。例えば、リハビリテーションセンターは医療型障害児入所施設でもあるため入院期間が長く、一般の人々が普通に迎える入学式や卒業式、あるいは成人式に参加できないことも珍しくありません。これらの行事は人生の節目となる大切なことです。私はたとえそうした行事に参加できなくとも、患者さんお一人おひとりの人生の歩みを大切にしたいと思っています。そうした思いはスタッフ全員がもっており、この施設内で行われる成人式は本当に心のこもった温かいものとなっております。

**患者さんの言葉の奥にある
本当の気持ちを読み取る努力を**

——今後、力を入れて取り組みたいことをお聞かせください。

和田 地域との連携をいっそう強化したいと考えています。私は長い間病院で勤務してきました。退院支援をする中できめ細やかなサポート、より充実した介護を支援するには、病院と地域の連携が本当に重要だという思いを強くしています。そうした点を踏ま

え、病院の中だけに留まるのではなく、積極的に地域の中に入っていきたいと思っています。

今ではさまざまな年齢の方たちが新たに看護師の仕事に就いています。一般の大学を卒業後に看護系の大学に入り看護師になった方もいます。あるいはいったん別な仕事を経験して、30歳を過ぎてから看護師になった方もいます。このように経験も経歴もさまざまな人たちと仕事をするためには、私もこれまでの経験に寄りかからずに、新しく勉強しなければならぬと感じています。

——先輩として看護師を目指す方々にアドバイスをお願いします。

和田 できるだけさまざまな経験をできるようにしていただきたいですね。それらはすべて看護師の仕事に生きてきます。

またいろいろな世代の方たちと交流することはとても大切です。特に上の世代の方たちとの交流は、得るものが大きいはずです。

看護師は、患者さんの言葉だけで物事を判断しては十分な仕事はできません。表に現れた言葉だけで対処してしまうと、大変な事態を招きかねません。たとえ患者さんが「大丈夫」と言っても、その目の動きや態度から真意を推し量る必要があります。だからこそ、ふだんからさまざまな方と交流し、人とかかわり方を自分の中に培っておくことが大切なのです。